

# 体についての子ども知見



室 谷 幸 吉

子どもらの認識の成長発達や意識の成熟していく状態などは、子どもらのコトバを通して、かなり明りょうにとらえることができ。そしてこの方法が、子どもたちの内面の状態を明らかにしたり、とらえたりしてゆくのに最も確なやり方だといえる。

子どもらの知識や認識の成り立ってゆく姿、伸びゆく姿は樹木にたとえることができよう。あることがらについて、なにかひとつの知識・知見を獲得したその瞬間が「知識の芽生え」に相当する。やがて伸び育って、かなり確固とした知識の幹を形成する。この幹が知識の軸となり、そのことがらに関する多様な側面について、たくさん関連知識を枝葉のように茂らせていく。こうして枝葉の茂りが濃密なほど（関連知識が豊富化するほど）一層深く、より広く、より正確に理解され知得されたといえよう。

また、子どもたちの知識や認識の成り立つ過程を階段にたとえる

とわかりやすい。一段目から順を追って、二段、三段、……とせり上がり、押しあげられ、伸長してゆくものなのだ。ときには、一段目で獲得した一次的知識のなかに追加や削除などの修正補正の手が加えられることもある。しかし、それらの発達はずべての子が申し合わせたように、たとえば、ひとつの機械で規格化された同じ製品が大量に生産されるように、同じ時期に、同じ高さの階段を上がるわけではなく、一人ひとりの頭や心の中で、個体別に個々の発達をしているのである。

☆ ☆

☆子どもたちはいったい、自分の体について何を、どのように、どれくらい知っているものなのか。

自分の体を構成している諸多の器官・身体各部位の名称を知ることなどは、いわば体の外面や形式を知ることであって、自身自体に

関する物的側面の認識にかかわっている。「人間自身」を考える場合、内面的・精神的・心靈的なもう一つの側面がある。

前者は後者に比べはるかにわかりやすく、とらえやすいものである。だからといって、子どもたちが生まれおちる時から自然にそういう知識をもっているわけではない。それらの知識のすべでは、生後数年の生活の中で、具体物とコトバを通して、子どもたちは、だれかに教えられ、学びかつおぼえてくるものなのだ。そこで、その知得の状況には、子どもの一人ひとりによって、あるいは生活環境の条件のちがひによって、バラつきが生ずる。

私たちは、身体に対する子どもらの知見の伸びについて、平均的な状態を観察し、ある年令にふさわしい身体知識の発達段階のものさしを作りあげることができる。そういうものさしの見当がついていると、子ども一人ひとりについて、年令並みに比べて、どの点のどのような知識がたりないか、または逆に優進しているかなどを見分けるのに便利である。

以下、満七才児と八才児、それぞれ約六〇名（東京山の手の中流生活階層家庭の男女児）について調べ得た結果をまとめてみる。

☆ ☆

体についての子どもらの物的知見を、次の三つの視点からさぐってみた。

一、身体各部位の名称把握の状態について

二、体の骨格について

三、口に入れた食物が、体内でどんな経路を通っていくか

一、部位名称について

子どもたちに人体輪廓図を示し、知っているだけの部位名を書きこませる。七才児だけの資料であるが、それによって子どもらの認識状態を見る。

部位名称で、最も記載数の少なかったのはA子の五个（頭・目・耳・おしり・ひざ）で最も多かったのはB子の二十五個（頭・左右の目・左右の耳・鼻・ほっぺた・口・あご・のど・むね・おっぱい・おなか・へそ・おちんちん・肩・ひじ・かんせつ・手首・手の指・ひざこざう・かかと・足の指・首・せなか・しり）であり、平均すると十二個であった。

頭部について記載された部位名は、表①の十二種であった。胴部は表②の八種。腕部は表③の九種。脚部は表④の九種。背部については表⑤の三種。いずれも記載された部位名を高率順にあげてみた。その記載数によって、身体部位に対する子どもそれぞれの認識状況を推知することができる。第⑤表のうち、おしりというのはいわゆる臀部を指し、しりの穴を肛門といい、はっきり区別している女兒が一人いた。

また、身体部位について誤った認識把握があった。「わきの下」

部位名	認識率
耳	91 %
頭	63
目	52.5
首	49
口	45.5
鼻	28
のど	28
ほお	14
毛	10.5
耳たぶ	3.5
まゆ	3.5
あご	3.5

部位名	認識率
おちんちん	49 %
おなか	42
へそ	42
むね	17.5
こし	10.5
おっぱい	7
また	7
わきの下	3.5
部位名	認識率
おしり	73.5%
背	63
せほね	28

部位名	認識率
指	59.5%
肩	56
うで	38.5
手	28
脈	24.5
ひじ	21
関節	21
手首	21
てのひら	10.5

部位名	認識率
もも	52.5%
あし	38.5
関節	31.5
指	28
ひざ	21
かかと	14
すね	3.5
つまめ	3.5
足首	3.5

表①……頭部  
 表②……胸部  
 表③……腕部  
 表④……脚部  
 表⑤……背部

表⑤ →

のことを「ひじ」というC子。「ひじ」の部分で「どう」と呼んでいるA子。といったことである。

二、骨格について

まず、私たち人間の体の中に、骨がないと考えている子どもは一

接合分離	7才児	8才児
A 腰部と脚部	3.5%	6.3%
B 肩部と腕部	3.5	6.3
A・B二つとも	10.5	15.7

表⑥

関節なし	7才児	8才児
腕部だけ	14.0%	6.3%
脚部だけ	—	9.4
腕・脚両方とも	24.5	6.3

表⑦

人もいなかった。「体の中には骨がある……では、その骨はどのようになっているのか」人体輪廓図の中にかきこませた。

そこで体の中にある骨の状態について注目をひくことがらのいくつかをあげてみよう。

○腕の骨が、肩の部分で、どのようにつながっているかがあいまいな者・肩関節の部分が脱落している者、同じように脚の骨が腰のところで、どのようにつながっているかが不明な者、従ってその部分が脱落しているといった者が目だつ。こういう接合部分の脱落者を率で示すと表⑥のようになる。

○つぎには、腕や脚の骨が、節のないノッペリした一本の棒のようになっていると考えている者、つまり、ひじ・手首やひざ・足首の関節が意識化されていない者がめだつた。

表⑦また、この無関節型認識とは反対に、たくさんのダンゴを串刺しにしたような多関節型の考え方をしている子が七才児・八才児にそれぞれ一人ずつあった。

○骨盤の意識が腰の部分に欠落している者が七才児六三%、八才児に五〇・二%見うけられる。骨盤があると意識している子どもの

表 ⑧

タイプ	7才児	8才児
①	% 42.0	% 47.1
②	14.0	44.0
③	14.0	3.1

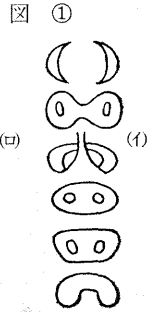
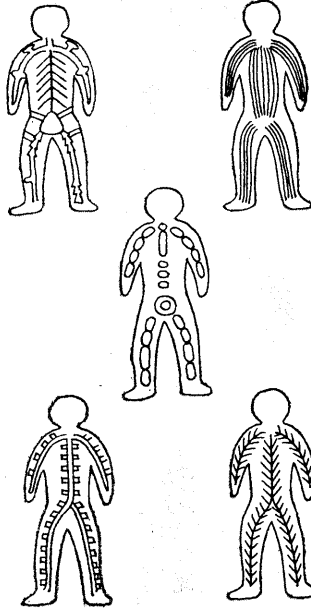


図 ②



中にも、その把握や認識の充実の度合には、さまざまな段階がある。図①(4)のような形にとらえている子どもが、七才児では二一%、八才児には二二%認められた。この段階に到達する以前の状態にあるもの、つまり骨盤意識の萌芽期ともみられる子どもたちは図①(4)のような表わし方をしている。

○肋骨の形状は大部分が表⑧のような三種にふくまれる。そして三型とものどの下の部分から腰の部分まで、胴の全面にわたって、横ぎまの骨が描かれている。これはまことに特徴的な把握である。

おそらく子どもらの頭の中には、魚の胴の部分をひきはがして観察される魚骨の形状が想起されており、それとほぼ同形のものとして人間の骨もとらえられているのではないだろうか。

腹腔の部分に肋骨を抜いている子が七才児に二人、八才児にわずか一人あった。

特殊な例ではあるが、図②のようなそれぞれの形体を考えている子があったので参考に供する。

### 三、食物の体内経路について

口に入れたたべものが体内でどんな経路を通っていくものかについて、人体輪廓図にかきこませた。

たべものの体内経路について、大きっぱない方をすると、意外にそのとらえ方はアイマイ・認識は不確実である。口に入れたたべものは、とにもかくにも一度は胃袋の中におさまるんだ、といった「食物たまり袋」の存在を、なにやらムード的にとらえているといった状況に観察される。

消化と消化器官の順序的な把握・認識は、子どもらにとって相当困難なことであるように見うけられる。

胃袋が二つある、つまりたべた物は二度別々な袋の中に入るのだ、と考えている子が七才児に一七・五%あった。八才児では、もう一つおまけがついて、三つあると考えている子が六・七%あ

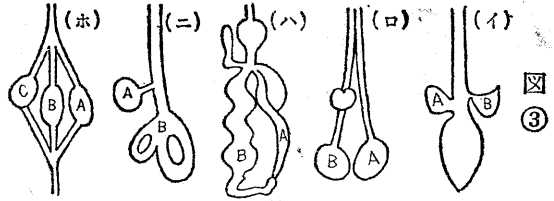


図 ③

た。逆に胃袋なんていうたまり袋はないと考  
えている子が、七才児に七%、八才児に一〇  
%いる。つまり胃が一つと考えている子は七  
才児では七三・五%、八才児では八三・三%  
ということであった。(胃に関連することだ  
が腸がないと考えている子が七才児に一七・  
五%、八才児に三・三%認められたことをか  
きそえておく)

また腸の部分がすごく短いという子はきわ  
めて多い。「胃」という名称で(食物のたま  
り袋をかきながら)言い表わせなかった子が  
七才児に一人いた。

それではどんなふうに関が二つあるのかと  
いうと、図③(イ)のように(A)・(B)と二つあるのだという。

父親が医者であるDは図③(イ)のような図を書いて、(A)を通して  
オシッコがで、(B)は胃袋であって、(B)を通してウンコがでるのだと  
説明する。Eも似た考えで(A)の部分にオシッコがたまり、(B)のここ  
ろにウンコがたまるのだと考えている。F子になると考えること  
が、もう一段こまかい。即ち、(A)の袋を通してゴハンが、オカズは  
また別な道を通して(B)にたまり、さらにオ汁はもう一つ別な(C)の袋  
とコースを通り、最後には三つの道のものが一つにおち合せて外に

でるのだと説明する。

このように、たべるものの種類によって、コースや、たまり場が  
ちがうという認識や把握は、きわめて特徴的な幼児期の思考のよう  
に思われる。

口から摂取したたべものの経路について、さまざまなタイプが認  
められた。

- 口↓胃袋↓心ぞう↓腸
- 口↓食道↓肺↓心ぞう↓てんとうまく↓腸
- 口↓食道↓もう腸↓肺↓腸
- 口↓食道↓心ぞう↓胃
- 口↓胃

といったぐあいである。これらの考えは、それぞれ過不足があつ  
て誤りである。誤りではあるが子どもらの思考や認識のスタガを知  
るには貴重な手がかりになる。

たべものが口から食道を通り、胃に入って、それから長い腸の旅  
を経て、カスは外に排出されるという、つまり口↓食道↓胃↓腸↓  
排せつの系統でとらえている子、つまり正常な認識に達している子  
どもは、七才児で一四%、八才児で六三・三%あった。

\* \*

(明星学園)